

愛情の系譜

愛情の系譜

圓地文子

新潮社



譜の系の愛情

昭和三十六年五月二十六日 印刷
昭和三十六年五月三十日 発行

定価 三〇〇円

著 者 圓 地 文 子

発行者 佐 藤 亮 一

東京都新宿区矢来町七十一

本文印刷 塚田印刷株式会社
製 本 東京神田加藤製本

発行所 株式会社 新 潮 社

東京都新宿区矢来町七十一
電話東京三四一局代表七一一一
振替東京 八〇八番

乱丁本はお取換えいたします。

土曜日の午後	五
鷺	一七
秋の影	三七
湖	五〇
家出	八〇
傷	九四
晩秋荒れ	一〇七
水のある風景	一二七
年の瀬	一四六
寒桜	一五九
寒に入る	一七三
結氷期	一八〇
雪しんしん	二〇三
雪崩れるもの	二一六
渦巻きの原理	二三三
蝶のいのち	二四九

愛情の系譜

土曜日の午後

湿気の多い午後だった。

舗道にはアスファルトが溶けて、靴の底を熱く吸っていたが、デパートへ一足入るとぬぐったように汗が消えて行った。

「ほっとするわね。夏の東京はデパートと映画館だけが極楽ね」

藍子は並んでいる兼藤良晴に言った。見かえった拍子に良晴の背がめっきり伸びて肩の厚くなったのに気づいた。

少年だと思っていたのが、急に青年に見えて、藍子は何となくぎよっとした。

「リフトで行く？」

「え」

解しかねた風に良晴は藍子を見た。むっつり笑わない顔の浅黒さに汗ばこりの汚れが交っていた。開衿シャツの汗

じみているのも家を離れている若者のあわれさを感じさせた。良晴は勤め先の川崎の工場から先刻藍子の事務所へ訪ねて来て、連れ立ってそこを出たのだった。

二人はエレベーターで八階まで昇って食堂へ入って行った。土曜の午後にしては混んでいなかった。窓に近いテーブルに腰を降ろした。長方形の大きいテーブルクロスは客の残した食物の汁でところどころ汚れていた。藍子は布の汚れていない席を拾って坐ったが、良晴は注意する暇もなく、醬油じみの薄茶色に滲んでいる上に肘をついた。

「お腹は空いていないの？」

答えはせずに、良晴は肯定とも否定とも見える曖昧なうなずき方をした。これも少年鑑別所で知りあって以来のこの子の癖である。

「五目そばでも食べる？」

「焼飯チヤムセンの方がいい」

と良晴はいった。川崎から昼飯を食べずに来たのだと藍子は思った。

「焼飯一つとアイスクリーム二つ……食べるでしょう」

藍子はウエートレスに注文しながら良晴の方を見た。今度のはつきりうなずいた。

「ちょっと姐ねえさん、姐さん、お団子を一皿」

姐さんという廃れた呼び方と変に甲高くしゃがれた声が注意をひいた。藍子も良晴もその方を見た。

よれよれのシャツの胸をはだけた小さく痩せた爺さんが、おかっぱの五つぐらいの女の子を腰かけさせた横で、立ったまま呼んでいた。

「お団子でございますか。二皿でございますね」

ウェイトレスは丁寧すぎる言葉に、ある威厳と軽蔑を含めて言った。

「いえ、あっしや食わない……これに一皿」

「食券を買ってまいりますから……五十円頂きます」

「へえ」

爺さんはあやまるように言って、シャツの腹をたぐった。銅貨をすくい出して渡し、そわそわ女の子の横に腰を降ろした。

隣の椅子にいた中年の女客が二人、穢らしきたなそうに爺さんの側の椅子から買物包みを取り上げて膝に乗せた。

「良晴ちゃん、今日は東京のうちへ泊るの」

と藍子は良晴にきいた。

「うちへは帰らない」

と良晴は言った。

「どうして？」

藍子は肘を立てた手の甲に軽く顔を乗せ、良晴の目に瞳を集めるようにしてきいた。深い二重瞼の濃い瞳が蛾のように張った眉の下でアンバランスな柔しさに静止すると、良晴は身内に逆毛立って来るいらだたしさが、撫でられたように萎えて行った。

「明日は来ちゃいけないって、親父から手紙が来たんです」

「お父さんから……」

どうしてだろう。良晴は少年鑑別所を出てから、少年工になって勤め先きの近くに下宿しているけれども、休日に来る時には出来るだけ暖かく迎えてやってくれるように藍子は彼の父母に頼んであった。

「姉さんの見合いがあるんです」

良晴は弁解するように言った。

「姉さんって……どこかに勤めている方？」

「ええ、山中証券にいる二番目の姉さんです。お婿さんと仲人がうちへ来るんだって……」

「ああ、そう……」

藍子は何気なく言ったが、見合いの相手に非行少年の弟を見せたくないのが、両親や兄弟の配慮であることはすぐわかった。どこの学校かなどと年ごろ相応の質問をされる

のが、家族のものには辛いのであろう。しかし折角旋盤の仕事覚えて真面目になりかかっている良晴に疎外感を自覚させるのはまずいと藍子は思った。

「明日私が暇だと一緒に海へでも行くんだけど、残念だね。アメリカで世話になった人が来ているので、案内しなければならぬの……今日も晩、その人と食事をするの」それは嘘だった。今日の夕方会うのはミス・リーではなく立花研一だったが、何となく良晴には嘘をいった。

「それアメリカ人ですか」

「ええ」

「男の人？」

「いいえ、女よ」

ミス・リーを男と思い違えられたおかしさで、藍子にはっこり笑った。良晴も誘われて笑うと、黒ずんだ頬や前歯にでこぼこのある口もとに、少年のあとけなさがあふれた。ウェイトレスが焼飯とアイスクリームを二人の前に置いて、同じ盆から女の子の団子の皿を滑らすように置いて去って行った。

「さあ、お団子だ。お食べ」

爺さんは驚いたように団子の串を盛った皿を見ている女の子に言って、一本の串を小さい手に渡した。

「お祖父ちゃん、ちょっとそこまで行って来るからな。食べてなよ」

爺さんは立ち上がり、団子の串をかぶりつくように横くわえしている女の子に言って、そくさテーブルの間を消えて行つた。女の子は見えかえりもせず食べている。良晴も焼飯が来ると女の子に負けずにがつがつ食いはじめた。良晴の箸を持つ手は握り箸だ。貧しい家の子でもないのに無関心に育てられたことが箸の操り方にもわかった。

良晴と女の子は焼飯と団子をほとんど同じ早さに食べ終つた。良晴がアイスクリームへ手を伸ばしたのと、女の子がまだ口の中で団子をもごもごさせながら、

「おじいちゃん」

と大きい声で呼んだのとは同時だった。女の子の口の端は飴で紫っぽく汚れていた。女の子はその時はじめて、おじいちゃんの側にいないことに気づいたのだ。

「おじいちゃん」

ともう一度大きな声で呼び、あたりを見まわして、答えないと、泣き声になった。

「おじいちゃん、おじいちゃん」

あいにく女の子の椅子は子供用の高いので、降りられなかった。女の子は泣き出した。

「おじいちゃんがいよいよオ、おじいちゃん」

「おじいちゃん、あっちへ行つたよ」

良晴がアイスクリームを食べながら、向い側から首を乗り出して片手で指し示した。藍子には曾て見せたことのない鮮明な動作なり言葉つきなりだった。

「あっち？」

女の子は良晴の指さした方を見まわしたが、一層心細くなつたらしく、もう一度、

「おじいちゃんあん」

と言つて声を上げて泣き出した。

「どうしたの」

と言いながら、ウエートレスが二、三人近よつて来た。先刻、買物包みを膝に片よせた女連れの客はもう傍にいなかった。

「おじいちゃんがいらない……」

女の子はしゃくり上げながらうったえた。

「おじいちゃんと一緒だったのね」

「そうそう、汚れたシャツのお爺さんが連れて来たのよ」
さつき取り澄ました切口上で注文を受けたウエートレスが言った。

「トイレへ行つたのかしらん」

「おじいちゃん、何ていったの……え」

女の子の顔をのぞき込んで一人がきいたが、

「おじいちゃん……あっち行つた……いなくなつたア」

と言うばかりで、女の子は足をばたばたさせて泣きつづけた。

「まだ、ちょっと前だったな」

と良晴がいった。

「トイレかも知れないや」

「アナウンスして見てはどうかしら……」

ウエートレスの一人が女の子の前に小豆アイスのガラス器を持つて来た。

「さあ、泣かずにお上がりなさいね。おじいちゃんすぐ帰つて来るわよ」

女の子は涙だらけの顔でウエートレスを見上げ、

「おじいちゃん」

と、もう一度鼻をつまらせて言つてから、小豆アイスの匙を握つた。

「捨て児じゃないかしら」

と、女の子の肩を抱いたまま、一人のウエートレスが仲間になさやいた。

何となく異様な目が大型のテーブルの周囲から、女の子

を囲んでいた。

「八階大食堂で四つぐらいのお嬢さんが待っていていらっしゃいます。お連れの方は至急おいで下さいまし」

アナウンスの声が間を置いて二、三度食堂内にも響いて来た。

小豆アイスで一時なだめられた女の子がまた、甲高い声で泣きはじめた時、先刻の小さい爺さんが体重のないような足取りで、吹きよせられるようにテーブルに近づいて来た。

「どうもお騒がせしてすみませんでした。ちょっと便所へ行って……へへへへ」

爺さんは泣くような笑い声で言い、ペコペコお辞儀をしながら、ウェートレスに囲まれている女の子の傍へ寄って行った。

「おじいちゃん」

女の子は狂ったような声を上げて、両手を精いっぱい伸ばした。

「何だな、まさ坊……おじいちゃん、手洗場^{ちようすば}にいたんじゃねえか。どうもすみませんでした。さあ、行こう、行こう」

爺さんは女の子を椅子から抱きとって下へ降ろすと、幾度もお辞儀をして歩き出した。女の子は爺さんのしなびた

腕にしがみつき、釣り下がるようにして歩いて行った。

「あれは捨て児未遂ね」

良晴と並んで食堂を出ながら、藍子が言った。

「そう、僕も思った……捨て児しに来てしくじったんだな」

良晴はむしろ快活な声で言った。あの女の子と爺さんに吸われていた良晴の目には、自分の方が仕合わせだと思ふ反動性の明るさが湧いていた。

「あのお爺さん、入って来た時からそわそわしていたわ。」

子供だけに食べ物をとったでしょう。私、立って行った時から変だなと思っていたのよ」

「デパートの食堂なんてうまい捨て場所だのにな。あれで出てしまえばうまく行ったのに……」

「やっぱり捨てきれなかったのね。捨て児の親って拾われるまでどこかに隠れて見えているってよく昔の人は言っていたわね。あのお爺さんもどこかに隠れて、そおと様子を見ていたのかも知れない。あの子の泣くのと、場内アナウンスまで始まったら我慢出来なくなっただわ。気の弱そうなお爺さんだった……子供を連れたまま心中なんかしなければいいけど……」

「先生に相談すればいいのに」

良晴は藍子を見上げようとしたが、小柄な藍子の顔は自分の目より下にあった。彼はてれくささと異様な物悲しさを同時に感じた。

「私に相談されたって、どうにもならないわ。せいぜい民生委員でも教えるだけ……」

藍子はいつか滅入った声になっていた。藍子は東京でミッシヨンの女子大を出たあと、アメリカの奨学資金で渡米してワシントンの大学の社会事業科を卒業した。そのあとニューヨークの福祉事業団体に一年ほど働いてから日本へ帰って来たのだが、名前だけ同じで、内容は比べにならないほど貧しい日本のそういう施設に関係していると、半身不随のようなもどかしさに、いらだたしくなるのが始終であった。

良晴は川崎へ帰って、明日の日曜を工場で働き、別の日を休日当てるのだと言った。藍子に会いたくて、東京へ出て来たのである。藍子はデパートを出ると近くの映画館へ入って二本立ての映画の一本をみてから、良晴と別れて外へ出た。

六時を過ぎていた。銀座の往来はまだ明るかったが、舗道には熱気が去って柳の緑の風に吹きなびくのがさわやかに目に触れた。数寄屋橋寄りの裏通りを歩いて教会の近く

の狭いビルジングの地下へ藍子は降りて行った。ワシントンで立花研一とよく一緒に行ったイタリア料理と感じが似ているので、食事というた藍子はそこを選んだ。

冷房のきいている部屋の中は裸の腕が寒かった。入口に近いガラス器の中に海老や蟹が氷の上に赤黒い殻を横たえて、ガラスは白っぽく汗を噴いていた。首根の赤くくびれたアメリカ人の太った背の向うに、立花のこっちを向いている顔があった。彼は藍子を見ていない風に顔を動かさないでいたが、藍子にはそれが立花の擬態であることがすぐわかった。藍子が近づいて行くと、立花は急に気がついた風に目を笑わせ、煙草を下に置いた。

「どうしたの？ 遅かったじゃないか……二十分も待ったよ」

「そう……でも……」

藍子は腕時計を見て、

「八分……いいえ、六分だわ、遅れたの……」

と言いながら、ゆっくりスカートの腰を撫でて立花の前に坐った。先き細^{ほそ}の形のよい指でスカートの両腰をすんなり撫でて椅子につく藍子の動作には柔和な甘美さがあって、立花は揺めくものをふと身内に吹き入れられた。

「何を食べる？」

「サラダとチキンのマカロニグラタン……あなた、お酒は？」

「僕はビールだ。君はキャンティか」

「日本では高いからだめよ。私はあなたのビール一杯頂けばいいわ」

「しみったれて来たね」

「だってうちを持ってご覧なさい。アパート代だけでも、私の月給の半分近く消えてしまうじゃないの」

藍子の言葉に結婚とつながるものが交ると、立花は目立たないほど顔を横向けるのが癖だった。今夜も心持ち顔を動かしたまま、目はやさしげにしばいていた。

「アメリカはよかったね。君のニューヨークのサラリーが四百ドルぐらいだったかしら」

「学校にいた時、アルバイトしても二百ドルは楽にもらえたんですものね……あなたとワシントンで会った時分よ」
「そうそう、あの時分はこっちもホテルへ鑑詰になって世界銀行通いしているだけで、金の苦労はなかったものね。お互いさまに、暢気といえは一生の中で一番暢気だったかも知れない」

ボーイが、ビールとサラダのボールと冷たいスープを運んできた。料理のさきにサラダを持って来るのはイタリアア

の習慣かどうか藍子は知らなかったが、ワシントンの大使館のパーティーでリンカーンメモリアムの日に立花を紹介されたあと、二人でイタリア料理へ行き、こんな風なサラダを食べたのが、藍子には今でも記憶に残っていた。

そのころ立花は勤務先の電力会社の融資獲得のために代表重役についてワシントンへ来ていた。彼のほかにも二、三人同僚がいたが、彼は若手の技術者として、その地方の地理的条件や電力事情を説明する役割を振り当てられていたのだった。大方の外資獲得運動がそうであるように、会見の日や交渉の経緯のすべては相手方に九分九厘まで権利が保留されているので、四、五日か一週間、恐ろしく多忙な日がつづくかと思うと、半月も一月も次の会見の予定がつかず、ぼんやりホテルに待機しているような退屈きわまる日がつづいた。視察に来ているのなら、優に大陸の各地を旅行出来る日数をワシントンだけに釘づけされていなければならぬ辛さは、こういう仕事にかかわったものでなければ考え及ばない種類の辛抱であった。

「うちの専務なんか、あの時ぐらい日本から送って来る新聞が楽しみで、広告欄の隅から隅まで読んだことはないって、今でも笑うものね」

立花は切れの長い臉の下で瞳を目尻に流して微笑した。

うすい險に湛えられている曖昧なうるおいが女の心に微妙な情緒をかき立てるのを彼自身知っていた。微笑している立花の目が幾度も手首の腕時計へ向けられるのに藍子は疾から気づいていた。

また今夜も鰻のようにぬらりと自分の手からぬけて行くのかと思うと藍子には何げなくしゃべっている立花の言葉が隣の卓の話声に交って耳の外を滑って行くように感じられた。

「あなた、今夜これからどこかへ行くんでしよう」

何度目かに立花の目が腕時計へ落ちた時、藍子は辛抱しきれずに言った。立花は藍子の勘のよさにたじろぐものを感じながら、

「いや、まだいいんだ……八時に部長の家に招かれているんで……」

と何げなく言った。そんなことは二、三日前電話で打ち合わせた時には一言も言わなかった。土曜日には食事をして僕のアパートへ来給え。日曜に用があるなら午前中に帰ればいいなどと言っていたのに、今はそんなことは忘れたように落ちつき払っている。藍子は心の中で唇を強く噛みしめたが、顔はかえってはややかに灯ともったように見えた。

「そう、それは恰度よかったわ。私も出来れば今夜早くうちへ帰って、月曜日までにタイプして置く手紙を片づけたかったのよ。明日は午後からミス・リーのお供をして、あちこちサイトシーイングに行かなければならないでしょう」

「ミス・リーってニューヨークの福祉事業の仕事でかなりいいポストにいた女の人だろう」

「ええ、でも日本人の現実生活をいくらかでも知るような滞在の仕方をしていって、さっさと職を辞めて来てしまったのよ」

「職をやめて……一体どのくらいいるつもりなの」

「半年ぐらいじゃないかしらん……お金のつづくだけ日本にいるつもりだって言ってたわ」

「どうしてそんなに日本が気に入ったのかしら……あの仕事で君とつき合ったためかな」

立花は藍子の機嫌をとるように言ったが、藍子は素気なく首を振って、

「そんなことないわよ」

と言った。

「それで帰ればまた復職出来るのか」

「復職はしないでしょ。でもあのくらい能力のある人な

ら、アメリカへ帰ればどこでも働けることは確実ね。それに社会福祉って仕事はあちらでも給料が安くて割に合わないと言われているのよ。それだけに仕事は多くってどこでも引っぱりだこなの……私にもよく帰って来いって、あっちにいる友達からすすめて来るわ」

「惜しいねえ。サラリーの点からいったら、こっちとは大変な違いだろう」

立花はそういう言い方が藍子を不機嫌にするのを知っているのに、他人のような白々しさで言ってみた。藍子はアメリカで働いていた職場で惜しがられるのを、強いて辞めて帰って来た。日本人がアメリカの奨学資金で勉強して、アメリカで働くだけなら大して意味のないことだ。曲りなりにも日本とアメリカと二つの国の教育を受け、両方の社会をいくらかでも知ったからには、自分の若さと知識と健康をいっぱいに使って、日本での社会福祉の仕事にぶつかってみたいというのが、ワシントンで学生生活していたころからの藍子の理想で、その考えは日本に帰って来た今も変わっていなかった。

しかし、そういう表面の理由の裏には日本に帰って来た上で、異郷で結ばれた立花との愛情を結婚によって完成したい意欲も藍子の中にあることは間違いない。それを知っ

ているのは立花だけの筈であるだけに、今のような立花の言葉は残酷に藍子には響いた。

しかし藍子は明るい笑顔を翳らせずに言った。

「そうね。時々惜しいと思う時もあるわ。人間ってあさましいもので、好きなアクセサリーなんか見つけると、ああ、あっちのサラリーならと思うわ」

「うふふ、君でもそうかなあ。アクセサリーに誘惑されることなんかある？ 可愛らしいな」

立花はほんとに可愛らしそうに言って、小柄な藍子を見た。首は長くすっきりしているが、肩は丸く小さく、腕にも知的な肉づきがあった。優雅であると同時に、譲らない強さをにじませている敏感な肉体であった。この小麦色の皮膚の下にひしめいている妖精を立花は決して嫌っているわけではないのだった。彼が藍子を愛しているのはそういう優雅さと強さのまじり合った溪流のような流動性であるのに、家庭の妻として考える時、その魅力は不思議に彼を萎えしぼませた。

この女を女房にするのは美しい猛獣と一つ檻に入るような気がするに違いないと立花は今も心で舌うちした。彼が今夜、招かれている上役の家には、結婚を前提として、彼に会おうとしている未知の娘が待っているはずであった。

立花はレストランを出て、狭い地下室の階段を上りなが

ら、藍子の腰を抱いて短い接吻をした。路面の生ぬるい空気が唇を離れた二人の間に吹き入って来た。

立花と別れて地下鉄に乗ったが、座席に腰かけると、一時に疲れが襲って来て、藍子は肩を落し目をつぶった。ふっと、隣席の若者が兼藤良晴に感じられ、目をあいて見てまたつぶった。良晴がそこにいる筈のないのに気づいてあらためて苦笑した。

こんなことなら、あの子とずっと一緒にいてやればよかった。そう呟いてみる傍から、今夜立花に逢えなかったら、やっぱり今より苦しかったろうと思った。食事を一緒にしたことで立花は自分を慰めたと思っているのだろうか。まさか……

立花の匂いのない舌の冷たい感触がまだ口腔に残っていた。

あの子は今ごろどうしているだろう。よれよれのシャツのほだけた胸に、鶏の毛のむしりあとのような粒の赤く斑立って見えたあの小さくしぼんだ爺さんは……ニューヨークでもしああいいう子供連れの老人を見れば、自分は躊躇なく声をかけて、どこかの相談所へ連れて行ったに違いない。それが無力なおせっかいに過ぎないことを、藍子は日本に

帰って来て以来、身にしみぬいていた。初めに勤めてみた少年鑑別所の仕事から離れて、国際社会福祉協会の渉外課に席を置くようになったのもそのためである。日本には、社会福祉に関する仕事は一応看板だけは揃っているようで、内部に入ってみると、仕事が軌道に乗っていない場合が多すぎる。少数の人の熱意だけではどうにもならない大きな隘路がそこにもここにも道を塞いでいるのだった。そういう不備な場所だからなお自分は働かなければならないのだと藍子は思った。

My strength to ten

because my heart is pure

わが力十人に叶うべし

わが心清ければ

学生時代に大好きだったアルフレッド・テニソンの聖騎士ガララハッドを歌った詩が心に湧き、唇まで上って来たが、口に含むように呟いて見た終りには唇の端が苦笑にゆがんでいた。私が清純だなんて、……藍子は薄く目ににじんで来る涙を瞬きちらした。私はあの人との愛情を完成しなければならぬ。そうしなければ私はあのことを生涯償えない女になろう……そう思うと身内の底の方まで滲みとおった痛みが気づけ薬のように藍子を生きかえらせた。